台大日本語文研究第 35 期
2018 年 6 月，頁 33-55
2018-03-31 收稿，2018-05-09 通過刊登
DOI: 10.6183/NTUJP.201806_(35).0002

真杉靜枝＜理歐哈庸的溪谷＞＜囑咐＞論
－以小說中白百合為切入點－

廖秀娟*

摘要

真杉静枝的＜理歐哈庸的溪谷＞、＜囑咐＞是 1941 年 11 月發表的作品集《囑咐》中收錄的二篇短篇作品。根據作品集《囑咐》復刻版中河原功的解說，這二篇作品乃是由以莎韻之鐘為素材而寫成的作品，明白的提示出二篇作品與美談莎韻之鐘之間的影響關係。

目前以戰爭時期女性作家的觀點來探討真杉靜枝以及她的台灣經驗的論文有數篇，然而針對這兩篇作品進行探討的論文則少有。本論文將延續先行研究中的觀點並且留意作品內容中與事實不同之處，更深入探討作品世界來進行論證。特別是在＜理歐哈庸的溪谷＞的作品最後，視點人物「我」前往理歐哈庸所掉落的谷底附近繪畫時，發現了從谷底用力向上生長的白百合場景。筆者將以兩作品中出現的白百合為切入點進行作品的深入探討。

關鍵字：白百合、莎勇之鐘、美談、愛國少女、真杉靜枝

* 元智大學應用外語系副教授

臺灣大學學術期刊資料庫

Lily in Masugi Shizue's work of 'The Valley of Riyon Hayon' and 'Message'

Hsiu-Chuan Liao *

Abstract

There were two short work of 'Message' and 'The Valley of Riyon Hayon' compiled into Masugi Shizue's book of 'Message' in November 1941. Kawahara Isao raised that the writing of these two work was based on the legend of 'Sayon's Bell'. He further articulated the influence of the legend on Masugi Shizue's work. Literature review shows that the methodology of adopting the perspective of war time female writer to investigate Masugi Shizue's work and her Taiwanese experience has been applied and several paper, published. Nonetheless, little research have been conducted to study the work of 'Message' and 'The Valley of Riyon Hayon'. This paper attempts to take one step further to discover any difference between fiction and reality by way of 'Lily' as the common theme appearing in both of the Masugi Shizue's work.

Keywords: Lily, 'Sayon's Bell'(Sayon no Kane),bidan, patriotic girl, Masugi Shizue

* Associate Professor, Department of Foreign Languages & Applied Linguistics, Yuan Ze University

臺灣大學學術期刊資料庫

真杉静枝「リオン・ハヨンの谿」「ことづけ」論
—白百合を手がかりとして—

廖秀娟*

要旨

真杉静枝の「リオン・ハヨンの谿」と「ことづけ」は、昭和 16 年（1941）11 月に出版された作品集『ことづけ』（新潮社）に収録された短篇小説である。『ことづけ』の復刻版の解説では、河原功は、「リオン・ハヨンの谿」が「映画『サヨンの鐘』（李香蘭主演）にもなって話題となった実話にヒントを得て書かれた作品」、そして「ことづけ」が「『サヨンの鐘』に似せて書かれた作品」だと述べ、真杉静枝のこの両作品と<美談>「サヨンの鐘」との受容関係を示している。

戦時下の女性作家としての真杉静枝や彼女の台湾経験を論じた論考は数本あるが、「リオン・ハヨンの谿」「ことづけ」の作品構造に触れながら論じた先行論は、わずかである。本稿では、先行論を踏まえ、史実との相違点に注意を払いながら、作品内部を更に深く検証していく。特に作品「リオン・ハヨンの谿」の末尾で「私」がリオン・ハヨンの落ちた谷に赴き、絵を描く際、その谷底から上に生えた植物の中に一輪の白百合を見かけた場面である。両作品に描かれた白百合を手がかりに、本作品を考えてみる。

キーワード:白百合、サヨンの鐘、美談、愛国乙女、真杉静枝

* 元智大学応用外国語学科准教授

臺灣大學學術期刊資料庫

真杉静枝「リオン・ハヨンの谿」「ことづけ」論
—白百合を手がかりとして—

廖秀娟

一、はじめに

真杉静枝の「リオン・ハヨンの谿」と「ことづけ」は、昭和 16 年（1941）11 月に出版された作品集『ことづけ』（新潮社）に収録された短篇小説である。『ことづけ』の復刻版の解説で、河原功は、「リオン・ハヨンの谿」が「映画『サヨンの鐘』（李香蘭主演）にもなって話題となった実話にヒントを得て書かれた作品」、そして「ことづけ」が「『サヨンの鐘』に似せて書かれた作品」[1]だと述べており、この真杉静枝の両作品と美談「サヨンの鐘」との受容関係を示している。そして、横路啓子は真杉静枝の作品集『ことづけ』の発行時期が 1941 年 11 月 5 日であることに着目し、「長谷川総督の鐘贈呈という物語構築が加速された出来事の後、かなり早い段階で真杉がこの物語に注目し、「リオン・ハヨンの谿」と「ことづけ」という 2 作を執筆した」[2]と指摘したのである。

戦時下の女性作家としての真杉静枝や彼女の台湾経験が論じられた論考[3]は数本あったが、「リオン・ハヨンの谿」と「ことづけ」の

---

1 河原功（2009）「真杉静枝『ことづけ』解説」『真杉静枝『ことづけ』日本植民地文学精選集台湾編 7』ゆまに書房、5-6 頁。

2 横路啓子（2010）「擬態する女性作家—真杉静枝「リオン・ハヨンの谿」「ことづけ」を中心に—」『銘傳日本語教育』13 号、127 頁。

3 李文茹は真杉静枝の戦時下の女性作家としての姿勢に着眼し、彼女の台湾経験や発表したエッセーを考察しながら、数多くの論考を行った。例えば、氏の博士論文『帝国女性と植民地支配—1930-1945 年における日本人女性作家の台湾表象』（2005 年 3 月、名古屋大学）、「「蕃人」・ジェンダー・セクシュアリティー—真杉静枝と中村地平による植民地台湾表象からの一考察—」『日本台湾学会報』7 号、2005.5、129-148 頁。「殖民地・戰爭・女性—探討戰時真杉靜枝台灣作品」『台灣文學學報』12 期、2008.6、63-80 頁。そして、高良留美子は真杉静枝の台湾経験から論を進め、「真杉静枝が書いた台湾　陰影のあるエッセイ」（『植民地文化研究』4 号、2005.7、76-79 頁）や「真杉静枝と台湾経験--昭和文学の失われた輪」（『社会文学』29 号、2009、49-56 頁）などの著作がある。林雪星は、日本統治期に台湾に滞在し台湾を描いた女性作家真杉静枝と坂口褝子を対比して二人の作品を分析することによって論

臺灣大學學術期刊資料庫

作品構造に触れながら論じられた先行論は、管見の限り呉佩珍と横路啓子両氏のみである。そこで、呉佩珍は1940年代に生まれた各テクストに描かれている「サヨンの鐘」神話を検証し、少女サヨンと先生との関係の変容に着眼することによって、本来帝国の狙うサヨンの純潔な乙女造形、引いては神話そのもの自身が解体される恐れがあると論じた[4]。

一方、横路啓子は「リオン・ハヨンの谿」「ことづけ」を更に深く掘り下げ、テクストの構造だけでなく、作品世界内の人物造形、風景描写などにも触れながら、「リオン・ハヨンの谿」「ことづけ」に語り手「私」の「擬態」がみられると指摘した。要するに、「語り手「私」は前線へ向かう（前線にいる）内地人男性を同じ趣味、嗜好を持つ同志として見つめている。いわば、兵士となる（なった）男性を擬態し、自らもそれに成り代わる「私」を描いている」[5]のである。以上のように、両氏の意見は、作品の主題が先生とサヨンの関係にあるか、または、「私」と先生の関係を中心に捉えるべきかに大きく分かれている。

前述したように、これらの真杉静枝の両作品は美談「サヨンの鐘」と深く関わっている作品だと思われてきた。明治末の日清戦争から日露戦争、日中戦争、太平洋戦争にかけて、戦線で勇敢な死を遂げた軍人、兵士の尽忠ぶりや銃後の国民の愛国表現が、しばしば政府や軍関係者、教育団体の意図によって美化され、美談や愛国佳話のようなものにまとめられた。美談の宣伝に、初めのうちは新聞報道、のちにラジオ放送、映画、レコードなどのマスメディア手段がよく利用され、国民に広く知られるよう働きかけていた。やがてそれら

じた。「兩個祖國的漂泊者—從坂口褧子的《鄭一家》及真杉靜枝的《南方紀行》《囑附》中的人物來看」『東呉外語学報』22号、2006.3、36-64頁。

4 呉佩珍（2008）「サヨンの鐘」神話の解体—真杉静枝「リオン・ハヨンの谿」と「ことづけ」を中心に」『社会文学』27号、156-168頁。のちに、上掲論文を底本に多少の改稿を行った上で中国語に訳された。（「台灣皇民化時期官方宣傳的建構與虛實:論真杉靜枝「沙韻之鐘」翻案作品」台湾政治大学『台湾文学学報』17期、2010.12、67-98頁）、2013年9月出版の呉佩珍著『真杉靜枝與殖民地台灣』（台北：聯經出版）の第五章（125-150頁）に収録された。

5 前掲横路啓子論、133頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

の美談が国民教科書にまで導入され、戦時下の理想的な少国民像の錬成にも活用されるようになる。

日本統治期の台湾での国語科教科書においても国家主義や軍国主義を少国民に刷り込ませるための美談が存在している。日下部龍太が台湾総督府版初等教育年間国語教科書を調査したところ、第五期（1942-1944 年出版）には台湾人が主人公として物語に登場する教材が二つあった。それぞれ「君が代少年」（巻 7 第 6 課）と「サヨンの鐘」（巻 9 第 17 課）である[6]。

「サヨンの鐘」は、台湾の実在人物を題材にした高砂族少女の愛国美談である。それは、1938 年 9 月 27 日に台湾宜蘭南澳溪で遭難事故にあったタイヤル族少女サヨンを讃えるものであり、後に日本にまで広く知られ、莫大な人気を博し、歌だけではなく、絵画、演劇、紙芝居、映画、脚本、小説など多分野にわたりリメイクされた[7]。出征する恩師を見送るために命を落とした原住民少女の献身的な行動により、彼女が「愛国乙女」と讃えられ、台湾総督府の原住民宣撫には格好の愛国美談となったのである。

ところが、「実話にヒントを得て書かれた」、「『サヨンの鐘』に似せて書かれた作品」だと思われる真杉静枝「リオン・ハヨンの谿」、「ことづけ」において、実話の「サヨンの鐘」といくつかの相違点が見受けられる。本稿では、実話との相違点を手がかりとして作品内部を更に深く検証していく。特に作品「リオン・ハヨンの谿」の末尾で「私」がリオン・ハヨンの落ちた谷に赴き、絵を描く際に、その谷底から上に生えた植物の中に白百合を見かけた場面に焦点をあて、両作品に描かれた白百合を以て、新たな読みを試みる。

---

6 日下部龍太（2011）「台湾総督府版初等教育年間国語教科書の基礎的研究―「民族」の使い分けに着目して―」『早稲田大学大学院教育学研究紀要』別冊 18-2 号、63-74 頁。

7 「サヨンの鐘」の関連資料について、中島利郎・河原功・下村作次郎著の『「サヨンの鐘」関係資料集』（日本統治期台湾文学集成 28、緑蔭書房、2007.6）に詳しく記述され、収録されている。

臺灣大學學術期刊資料庫

二、美談「サヨンの鐘」との相違点

「サヨンの鐘」は、タイヤル族少女サヨンが 1938 年 9 月 27 日に台湾宜蘭南澳溪で実際にあった遭難事故を元にした話である。その事故は、同年 9 月 29 日付の「台湾日日新報」に「蕃婦溪流に落ち行方不明となる」という見出しで報道された。リヨヘン社駐在所の警察官で、教育所の先生でもあった田北警手に召集命令がくだされ、そこで、少女サヨンらが荷物運びの手伝いとして同行することになった。田北の出発当日、台風の嵐が襲いかかったにも関わらず、それでも入営の日に間に合わそうと、やむを得ず台風の中を発つことにした。その事故は、その同行途中で起きた。下山途中、仮木橋をわたろうとした際、サヨンが激流に落水し、遭難してしまったのである[8]。

当時の新聞にこの事故が掲載されたが、それほど関心を呼んではいなかった。事故発生後の三年目、1941 年 4 月 14 日に長谷川総督が「愛国乙女　サヨンの鐘　昭和十六年四月臺湾総督長谷川清」と刻んだ鐘をリヨヘン社に贈呈したことがきっかけとなり、再び注目されるようになった[9]。

1941 年 4 月 15 日付「台湾日日新報」の報道[10]によると、長谷川清総督が「愛国少女サヨンの過きし日の篤行を聴き痛く感動し」、「暴風雨を冒して率先応召軍人の荷物」を搬送し、「一命を軍国に捧げた愛国至情」と「親に仕へて孝養を尽したといふ忠孝の心」を有する立派な「帝国臣民」だとサヨンを賞賛した。要するに、長谷川総督、更に緻密に言えば総督の鐘贈呈によって、サヨンが「蕃婦」から「愛国乙女」「愛国少女」になり、この話も「蕃婦」サヨンの遭難から美談「サヨンの鐘」に昇華したのである。

そして、1940 年代に入ると、さまざまな「サヨンの鐘」が生まれ、

8　下村作次郎（2007）「『「サヨンの鐘」関係資料集』解説」『「サヨンの鐘」関係資料集』ゆまに書房、635-652 頁。

9　周婉窈（2003）『海行兮的年代：日本殖民統治末期臺灣史論集』允晨文化、17 頁。

10 中島利郎編・著（2005）「日本人作家の台頭 4　サヨンの鐘」『日本統治期台湾文学小事典』緑蔭書房、275 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

楽曲にとどまらず、絵画、演劇、紙芝居、映画、脚本、小説、教科書と、多方面にわたって再構築されていった[11]。下村作次郎が上記の各内容を史実と見比べながら、時代背景、サヨンの造形、恋人の有無、遭難の描写など十二の項目から各々の相違点を調査した[12]。結論から言えば、劇本やシナリオ、小説二冊（呉漫沙著・春光淵訳『サヨンの鐘』、長尾和男著『純情物語愛国乙女　サヨンの鐘』）では、いずれもサヨンを「愛国少女」として描き挙げ、それぞれ劇的な効果を求めるために、大幅な書き換えや、虚構の登場人物の増加、改変が行われている。その一方、国民学校教科書の「サヨンの鐘」では、恋愛的な要素が一切抑圧され、サヨンが、親に孝を、国に忠を尽くし、銃後の奉公に献身的に励む理想的な少女/愛国乙女として描かれている。

昭和 16 年（1941）4 月 1 日、70 年間にわたって続いてきた小学校は、「皇国ノ道に則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」[13]とした、軍国主義的な性格の強い「国民学校」になった。戦時下において国家が教科書に付与した使命と引き合わせて考えれば、「皇国民ノ錬成」を主眼とした国民学校の教科書に載

[11] 下村作次郎（2002）「日本から逆輸入された『サヨンの鐘』の物語―中央舞台の台湾上演と呉漫沙の『サヨンの鐘』」『台湾の「大東亜戦争」文学・メディア・文化』東京大学出版、185 頁。下村氏の調査に基づいて、当時、各種の『サヨンの鐘』が次のようにリストアップできる。
・村上元三作、劇本『サヨンの鐘（一幕）』（『国民演劇』1 巻 10 号）1941.12
・呉漫沙著『莎秧的鐘　愛国小説』（南方雑誌社）1943.3
・映画脚本『サヨンの鐘』（『台湾時報』五月号）1943.5
・呉漫沙著・春光淵訳『サヨンの鐘』（東亜出版社）1943.7
・長尾和男著『純情物語愛国乙女サヨンの鐘』（皇道精神研究普及会）1943.7（清水宏監督、スクリーン『サヨンの鐘』封切り。1943.7）
・国民学校教科書『サヨンの鐘』1944

[12] 下村作次郎（2002）「各種の『サヨンの鐘』の検討―劇本・小説二冊・シナリオ・教科書」『中国文化研究』19 号、1-18 頁。2012 年 9 月に中国語に訳され、『中心到邊陲的重軌與分軌(中)』（呉佩珍編、台北：国立台湾大学出版中心、33-62 頁）に収録された。なお、各テキストの相違一覧表について、下村作次郎氏の論考以外に、呉佩珍（2010）「台灣皇民化時期官方宣傳的建構與虛實:論真杉靜枝「沙韻之鐘」翻案作品」（台湾政治大学『台湾文学学報』第 17 期、67-98 頁）の文末にも、対照表（90-97 頁）が付録されている。

[13] 昭和 16 年 3 月 1 日に「国民学校令」（勅令）が公布された。その第一章第一条は、「国民学校ハ皇国ノ道に則リテ初等普通教育ヲ施シ国民ノ基礎的錬成ヲ為スヲ以テ目的トス」と定められた。（入江曜子（2001）『日本が「神の国」だった時代―国民学校の教科書をよむ―』岩波書店、9 頁）

臺灣大學學術期刊資料庫

せられたサヨンは、帝国の期待にかなえた理想的な皇国少女像のみならず、教科書版「サヨンの鐘」は正に帝国の思惑を最も代表できるバージョンだともいえよう。

したがって、真杉静枝のこの両作品がどれほど国策と肩を並べたか、または離れたかを測るには、帝国の思いを的確になぞった教科書版「サヨンの鐘」が重要な指針となると考えられる。

一方、「リオン・ハヨンの谿」「ことづけ」の両作品のなかで、当時の「サヨンの鐘」と内容的に異なっている部分が、三つある。先生という人物像の設定、リオン・ハヨンの出身地及び部族の設定、そして、彼女の死場所である。作品内の設定では、先生が警察官からインテリ青年へと、そしてリオン・ハヨンの出身の地は、蘇澳郡番地「タイヤル族」から阿里山の「ツウオ族」へと変わったほか、彼女の死場所が「豪雨に水増した」激流から「何千丈の谿底へ」となる。

以下では、作品を読み解きながら、特に少女の死場所が「豪雨に水増した」激流から「何千丈の谿底へ」と書き換えられたところに注目していきたい。この書き換えの裏には、実話にない白百合の登場が深く関わっていると考えられる。

三、「私の物語」－村西との〈恋物語〉

「リオン・ハヨンの谿」は、十二歳の時に父を亡くした「私」が、母と二人で経営していた絵画の店に来た村西武美という文化学院の学生との出会い、別れ、再会の経緯を描いたものである。絵画と声楽を専攻する村西が経済的理由で映画俳優となったが、失敗し、日本から姿を消した。8 年後、台湾に写生旅行に出かけた「私」は、偶然にも村西が台湾に渡り原住民教育に携わっていることを知り、彼がいる阿里山に行って再会を果たしたが、翌日、村西が更に山の奥地へ転任することとなり再び別れることになった。ところが、転任一カ月も経たないうちに、村西が応召となり、彼の荷物を運ぶために同行したリオン・ハヨンが下山途中に足を滑らせて谷底に転落

臺灣大學學術期刊資料庫

してしまったことを、新聞で読んだ「私」は、出征前に村西から贈られた画材を使い、「死を身近に持つて仕事しよう」と決心した。

従来の論では、リオン・ハヨン（サヨン）と先生の関係は「純粋無垢な師弟関係」から性的な関係が仄めかされる「男女関係」にとなったことで、本来プロパガンダとして新聞メディアによって構築されたリオン・ハヨン（サヨン）の献身的な愛国純情乙女のイメージが崩れ、「サヨンの鐘」神話の根本的構造が解体されることとなったと論じられてきた[14]。

しかしながら、上記の梗概をみるとわかるように、視点人物「私」を棚に上げて、先生とリオン・ハヨンの関係のみを考えるのは、明らかに作品の構成を顧みない分析になっていると言わざるを得ない。そもそも、根本的に問い直すべきなのは、美談「サヨンの鐘」をモチーフにして書かれた両作品において、なぜ「本来中心であるはずの原住民の少女はほとんど描かれず、多くの紙幅が語り手「私」と先生（内地人男性）の関係の描写に費やされている」[15] のかという点である。

作品「リオン・ハヨンの谿」の大半は、視点人物「私」と村西の描写に費やされていて、少女リオン・ハヨンについての描写がわずかで、しかもほとんど「私」の目線を通してしか描かれていないのである。

- リオン・ハヨンといはれる少女は、誰か内地人の人にもらつたものらしい緋の着物を着てゐたが、この山の蕃人達の風貌がみんなさうであるやうに、大へん典雅な美しい顔をしてゐた。鼻がとても高くて、睫毛の濃い大きな眼は、さすがに蕃界人の性格をみせて、いくらか嶮しく鋭いのであつたが、口

[14] 前掲呉佩珍論、156-168 頁。
[15] 前掲横路啓子論、128 頁。そして、垂水千恵も横路啓子と同様の疑問を示している。「余計な「私」の物語が大半を占める構成の逸脱性を積極的に評価できるかどうかは疑問である」。（垂水千恵（2015）「書評－呉佩珍著『真杉静枝と植民地台湾』」『日本研究』51 号、206 頁）

臺灣大學學術期刊資料庫

許は、きつくしまつてゐて、それに、背がすらりと高かつた。（210 頁[16]）

- 蕃人の踊りを踊りはじめた。子供達ばかりなので、唄ふ声は可憐で、足踏みならす体つきは、一所懸命なのである。いちばん後ろから、極く素直な、そして、大まかな艶のある動作で、十六になるといふリオン・ハヨンも踊つてゐた。（211-212 頁）
- 私は、見送つてゐるうちに、なんとなく、その二人の後ろ姿を、まるで夫婦みたいだ、と意地悪く弾きながら、しかし、何にしても、たうたうと、悲しさが音をたてて、胸の中へ、体の芯へ流れ込むやうに思へて弱つた。（213 頁）

「私」の目付きによる、鼻や睫毛、目、口許などの彼女の五官や、「艶のある動作」が描かれて、彼女の 16 歳の〈女〉としての〈身体〉が強く映し出されている。「まるで夫婦みたいだ」という「私」の思いによって、それが生殖可能な身体だということにも同時に気づかれる。

ところで、村西がリオン・ハヨンに向ける目線はどうであろうか。村西の送別会の席で、彼は蕃人を「清純な性格」、「きれいな心」を持ち、「まるで天使みたいなもん」だと「私」に話した。そして「私」をお別れ会に誘う時に、「この学校にも蕃人の可愛い子供がゐますし、あす僕が出発してゆく山からも、一人蕃人の小さな女の子が、荷物をかつぎに来てゐますから」（207 頁）と村西が言った。ここで注意すべきなのは、村西にとってリオン・ハヨンはあくまでも「小さな女の子」だということである。村西だけではなく、女中も「ああ、さういふ名の蕃人の女の子です」（209 頁）と称した場面があり、リオン・ハヨンを「小さな女の子」と思っている。そこで見えてくる

[16] 本稿における本文引用は、すべて河原功監修（2000）『真杉静枝『ことづけ』日本植民地文学精選集台湾編 7』（ゆまに書房）に拠った。傍線、下線は筆者に拠るものである。

臺灣大學學術期刊資料庫

のは、「私」と村西の、リオン・ハヨンに向ける目線の違いである。なぜ「私」の目には、リオン・ハヨンが 16 歳の生殖可能な女として見えたかというと、それは、恐らく「私」の村西に向ける〈恋心〉によるものだと考えられる。作品の本文を詳細に検討すれば、「私」の村西に抱く<恋心>が自然と浮かび上がってきたものだと思われる。

「私は、一歩一歩、大人になつてゆく状態の中で、ふと、村西さんの風貌を思ひ出すのであつた」（192 頁）、「私は、ここへ来ると、急に、どの人の肩つきをみても、はつとするほど、村西さんの風貌に思ひあたつた」（201 頁）、阿里山行きの汽車の窓から、「私」は風景を眺めながら、「この山に住んでゐる、内地人達の面影を、知らぬ間に村西さんの顔にして、思ひ描いたりしてゐる」（202 頁）。

そして、この中で、「私」の<恋心>が最も明白に示されたのは、二人の再会を胸が裂けるほど興奮している「私」に対して、「極くあたりまへのやうな顔で」接していた村西の冷淡さに、「私」が「何かものを荒々しく投げつけたいやうな衝動にかられ」、「不満」（207 頁）に思った場面と、村西がリオン・ハヨンとともに山奥に赴任する際に、二人の後ろ姿を「まるで夫婦みたいだ」と思い、「何にしても、たうたうと、悲しさが音をたてて、胸の中へ、体の芯へ流れ込むやうに思へて弱つた」という場面である。

言葉を換えて説明すると、視点人物「私」の恋の挫折によって、二人の関係に向けた眼差しが歪み、リオン・ハヨンが村西の思う「まるで天使みたい」な「小さな女の子」から恋の敵となり、本来、村西とリオン・ハヨンとの間にある純潔な師弟関係に、性欲を暗喩するような「セクシュアルな関係」[17]を投げかけたのである。

なぜ、村西が「私」の恋愛対象になったのか。「私」の言葉によると、十二歳の時に父に死なれた「私」の命の中で「そのやうな英雄的な面影の持合わせがなかつたせゐ」で、村西が「私」の「心の第一頁にあざやかに出てくる」存在となった。ところが、彼女の言葉

[17] 前掲呉佩珍論、163 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

にそって追っていくと、村西武美は、「英雄的な面影」どころか、むしろ明治期をはじめとする、近代日本によくみあたる、内的な故郷としての近代日本の荒廃や拘束、閉塞感によって、故郷にいたたまれなくなり、植民地や外地へと流れていく敗北者であろう。漱石「門」で例えるならば、宗助に妻を奪われて大陸浪人となり満州へ渡っていた、宗助の親友安井であろう。

村西武美も同様、母に暴力を振るう父親、京都の撮影所で意地悪をやるライト係り、彼を張り番する長崎呉服の親方、新竹州の「けしからん役人」などの人達との確執で、彼は東京の神田から、関西、長崎、植民地台湾新竹州へと流れ、そして更に山の奥へと追い込まれていった。それにもかかわらず、「私」の目には、村西武美は「英雄的」であった。その裏には、二人の共同の趣味である絵画が大きく関わっている。

女学校を卒業した「私」が父の後を継ぐように、女子美術学校に入学し、画家にもなったが、母は、「決して、父の使つてゐた絵具を私に使はせてはくれなかつた」。ところが、村西が出征する前にすべての絵具を「私」に託した。絵具の贈与、絵への志を語り合う村西は、まさに、長年欠如になった父の代わりのような存在である。そこで父＝村西＝恋/思慕の対象といった構図が明白に浮かび上がってきたといえよう。

出征する村西から絵具類を手に入れた「私」は、彼の絵具を使いながら、リオン・ハヨンが先生/村西に同行したように、「私」も「死を真近に持つて仕事をしよう」という意気込みを以って絵を描き、前線で戦う彼に同行するかのような疑似連帯関係の成立によって、「私」の〈恋物語〉を完結させたのである。

「私」の村西にむける<恋心>の介在によって、「私」の視線が歪み、リオン・ハヨンの「愛国乙女」としての一面が全く隠蔽され、彼女が恋敵として「私の物語」世界に登場してきた。それを裏返して言えば、「私」が語る、村西武美との<絵と恋の物語>世界においては、リオン・ハヨンが如何に国に献身であったか、原住民の宣撫

臺灣大學學術期刊資料庫

工作がどれほどの成果をあげたかが「私」の関心事ではないことにもなる。

従来の論では、先生とリオン・ハヨンとの関係のみに目を向けていて、「私」と先生（村西）との関係が等閑に付されがちである。そもそも、「私」は最初から、「リオン・ハヨンの谿」を「私の物語」という意気込みで語っているのである。作品冒頭の近くで、「でも、この女学生達のことは、この私の物語からは、はぶいてもよささうである」（171 頁）とあるように、「私」は、「私の物語」を語る時に、意図的に取捨選択を行っていることがわかる。考えるべきことは、なぜ「私」と村西武美が中心となった「私の物語」のタイトルが「リオン・ハヨンの谿」となったのだろうかということだ。しかもそこは、本来、史実にはない、架空の場所であることが更に疑問を募らせる。

四、二重の封印

作品末尾で「愛国の乙女リオン・ハヨンは、駐在所の絵画教師村西武美氏の応召に際して、勇んで、その荷物を背負ひ、深い森林をわけて先に立つて進むうち、足を踏み滑らせて、何千丈の谿底へ陥ち、行方知れずになつた」という新聞記事―帝国のプロバガンダ―の力で、「蕃女」リオン・ハヨンが「愛国の乙女」へと昇華した。そして「蕃女の殉死」に激励され、村西武美も「駐在所の絵画教師」から、「帝国兵士」へと成り代わったのである。この新聞記事によって、近代日本に順応できない村西が背負ってきた敗北者、はぐれ者としての一面が隠蔽されたといえよう。

前述したように、彼は蕃人が「清純な性格」や、「きれいな心」を持ち、「ナイーブ」で「まるで天使みたいなもん」だと思っている。「けしからん役人」を殴ったから、山の奥へと追い込まれてきたが、彼が東京の神田から、関西、長崎、新竹州、この山奥に至った道のりを振り返ってみると、母に暴力を振るう父親、撮影所で意地悪をするライト係り、彼の張り番をする長崎呉服の親方、新竹州の「け

臺灣大學學術期刊資料庫

しからん役人」という<山の下の世界>はどれも、蕃人（<山の上の世界>）とは正反対の存在であろうと考えている。したがって、8年ぶりの再会であるにもかかわらず、「あした此処を発つてしまふことを、極くあたりまへのやうな顔で云つてゐる村西さん」に対し、「私」は「いつとはなしに、不満に感じてゐる」が、しかしながらすべてを放り出して<山の上の世界>に献身を決意した村西にとっては、「私」は、所詮<山の下の世界>の人なのであろう。

そのような村西の思いを全く知らないまま、阿里山まで追いかけていた「私」には、リオン・ハヨン並びに蕃社は蕃人教化の成功例としては見えず、むしろ村西を〈山の上の世界〉に足止めをした恋敵のみであり、足枷であるとみえるのであろう。「私」は、「いいお絵をお描きになつたのですつてね。おめでたう。でも、私も負けない気で、絵を描きに来ましたよ」（205頁）、「でも、お絵の方も、しつかりおやりになつて下さいね」（211頁）、「絵の方の仕事は、ぜひ、私と競争で、やりませう」（212頁）と、しきりに絵を以って、村西を〈山の下の世界〉へと引き寄せようとしたが、山奥に赴任する「二人の後ろ姿」がまるで「山ふところの中へ吸ひ込まれてゆく」ように映った村西は、恐らく<山の下の世界>には降りてこないだろうと諦めた。しかし、そのような彼を<山の下の世界>へと降りさせたのは、応召という国家の暴力でしかないが、それも、新聞記事の美談報道によって、封印され、隠蔽されたのである。

一方、村西と同じく、新聞記事は「蕃人の女の子」リオン・ハヨンを「愛国の乙女」と讃えて、彼女を献身的な愛国少女と作り上げた。確かに、この新聞記事の掲載で「蕃人の女の子」リオン・ハヨンが聖化され、愛国乙女として神話化された。しかし、前述したように、「私」が語る、村西武美との<絵と恋の物語>世界において、国が如何にプロパガンダを操ってリオン・ハヨンの死を美談化や神話化するのかということは「私」の関心の外であった。そのため、リオン・ハヨンが亡くなったとはいえ、「私」の描く、村西との「恋物語」の中で、「私」の目線を通して映し出されたリオン・ハヨンの

臺灣大學學術期刊資料庫

16 歳の少女としての「セクシュアリティ」は、まだ未処理のままであったのだ。

作品の末尾で、リオン・ハヨンが谷に落ちたことを知った「私」は、再び阿里山に戻り、彼女の落ちた谷間に赴いた。そして、その谷底から上に生えた植物の中から「露をふくんで、パキパキと音のしさうな命限りの花弁の反りを浮び出させてゐる」白百合を見かけて、リオン・ハヨンの腰の小さな鐘の音とも思わせられた鐘の音が「リンリンと」聞こえた。その谷底から如何にも生命力強く反り伸びようとする白百合はまさしくリオン・ハヨンの生まれ変わりのようであろう。

> カンバスに向つて、ひと刷毛、百合の輪廓をぐいと描きこみながら、この時、私は、谿谷から、ふと幽かに、リンリンと、小さな鐘の音がするやうな気がした。(217-218 頁)

渡部周子の調査によると、日本では、文学や美術作品に白百合が描かれることは、明治期に至るまでほとんどなかった。西洋キリスト教の伝来により、白百合が女性の純潔を聖化するシンボルとなった[18]。白百合は聖母の純潔を象徴し、新約聖書では受胎告知の場面で、大天使ガブリエルが白百合の花を手に携えてマリアのもとに訪れた。聖母マリアはキリストを生む以前においても、出産したあとにおいても、処女であったことから、聖母のアトリビュートとしての白百合が聖母の純潔を象徴する花となり、未婚の少女たちを純潔な存在として、清らかさ、奥ゆかしさ、神聖さ、無垢さを規範するものとなった。

聖母の純潔無垢を象徴する白百合に、リオンの腰にかけていた鐘と思わせる「リンリンと」鳴った鐘の音を加えて、「私」は、彼女の落ちた谷間—リオン・ハヨンの谿—で、「私」と村西のつながりとも

[18] 渡部周子(2007)『〈少女〉像の誕生－近代日本における「少女」規範の形成』新泉社、203 頁。

臺灣大學學術期刊資料庫

いえる絵の具を使い、リオン・ハヨンの「セクシュアリティ」を永遠に聖母の純潔を象徴する白百合の絵に封印するのである。それでやっと「私の物語」が完成となった。その封印の手続きは「私」の村西との〈恋物語〉の成就においてどうしても必要だったからこそ、リオン・ハヨンの生まれ変わりとしての白百合の成長/封印する場所の設定が、「豪雨に水増した」台湾宜蘭南澳溪の激流から阿里山の山奥の「何千丈の谿底へ」と書き換えられなければならなかったのだ。

五、作者による国策色の補強

同じく「サヨンの鐘」を題材にした、真杉静枝のもう一つ作品「ことづけ」は「リオン・ハヨンの谿」の後日談の形をとっている。語り手「私」は、女流作家で、慰問講演のために台湾、広東に赴く。出発の際に、友人・露原友子から前線の南支に配置された兄・露原友二郎へのことづけを頼まれた。妹からのことづけを友二郎に伝え終わると、今度は彼から一つのことづけを委託されることになった。教え子であったサランの愛国行為を記念するため、台湾総督から鐘が贈呈されたが、その鐘を彼の代わりについてほしいというものであった。

「ことづけ」が「リオン・ハヨンの谿」の後日談の形をとっていて、男主人公の露原友二郎の造形も、村西武美と同様、知識人で、「家で両親と気があひませんのでね、」「蕃界に入つて、蕃人教育」に携わっているという相似の設定がされている。特に、両作品ともに、新聞記事を引用する形をとるので、よく同一モチーフの創作作品だと思われてきた。しかし、ここで問うべきなのは、同じモチーフの作品なら、なぜ二つも書く必要があるのかということである。むしろ、両作品の相違点に目を向け、なぜ、作家には似つかわしい作品を二つも書く必要があったのかを究明すべきであろう。以下は、両作品において、語り手「私」(女子美術生/女性作家)、先生役の村西武美/露原友二郎、作品に載せた新聞記事、白百合、そして鐘の登場の相違に着目しながら検討する。

臺灣大學學術期刊資料庫

「リオン・ハヨンの谿」の「私」とは違い、「ことづけ」の「私」は、「私の物語」を語る意図もなく、露原友二郎に恋という疑似感情もなく、むしろ「平和」—所謂大東亜親和としての「平和」—を掲げて、国のために前線に赴いて兵士を慰問する愛国作家である。

そして、「ことづけ」の露原友二郎は両親と気が合わなく、家を飛び出したが、「東京の家の者は、みんな元気だから」とことづけを頼む妹や、彼の出征を見守る家族がいたため、村西のような深刻な事情もなく、追い詰められて植民地に流れてきたはぐれ者の失敗感もなかったのである。

「リオン・ハヨンの谿」と同じ設定は、新聞の報道記事と谷間の白百合であるが、それでも、若干の変更が見当たる。以下は「リオン・ハヨンの谿」と「ことづけ」でそれぞれの新聞記事の内容である。

> 「愛国の乙女リオン・ハヨンは、駐在所の絵画教師村西武美氏の応召に際して、勇んで、その荷物を背負ひ、深い森林をわけて先きに立つて進むうち、足を踏み滑らせて、何千丈の谿底へ陥ち、行方しれずになつた。(中略)。一方村西武美氏は、可憐な蕃女の殉死に胸を打たれ、激励され、一層発奮しながら、勇躍征途についた。——そんな記事であつた。(「リオン・ハヨンの谿」215-216 頁)

> 「サラン・ヨハンが、かつて、勇躍応召、戦地に向つた露原友二郎氏の壮途を送るべく、同氏の荷物を可憐な肩にかついだまま、千丈の谿谷の上の細道にさしかかつたのであつたが、そこから、足をすべらし、その千丈の谿の底に身をのまれてしまつた陥落の際、少女は、立派な国語で、露原先生万歳!といつたので、この愛国少女の切情に露原氏も断腸の思ひの中にも勇躍、一層報国の誓ひをたてて征途についたものでもあつたが、(後略)/それをきいた××台湾総督はこの程、その細道の附近に

臺灣大學學術期刊資料庫

「サランの鐘」といふ大きな鐘を寄附して、この道を通る人は、みなこの鐘を一つ叩いて、谷底の少女の霊をねぎらひ、且つ、蕃界人への愛国精神鼓吹にしようといふことになつた―」（「ことづけ」266-267 頁）

同じくプロバガンダとしての新聞記事だが、その国策宣伝の度合いが明らかに違うのである。「リヨン・ハヨンの谿」の記事では、リヨン・ハヨンを「愛国乙女」と讃えたが、彼女の奉仕はあくまでも史実の「荷物を背負い」に基づいている。ところが、「ことづけ」では、サラン・ヨハンが愛国少女像と讃えられて、彼女の死が帝国によって再生産されて蕃界の人に愛国精神を鼓吹する存在となっている。この台湾総督の思いを裏返して考えると、「サランの鐘」をつくことは、帝国の欲望に加担して、植民地における原住民の戦争動員にもつながる。

次に、「リオン・ハヨンの谿」で「私」の恋敵でもあったリオン・ハヨン像が、「ことづけ」のサランになると、全く抑圧されているといえよう。

「十七の少女でした。蕃人といつても、このへんのは大へん顔立ちが美しくてね、みんな純真で、露原さんなどは、こんな美しい未開の心情が、まだこの世にあつたとは思はなかつたつて、(中略）それで、蕃人達もすつかり露原さんになついてしまつて、出征の時なんか、みんな、獰猛な風貌の蕃人達が、しんと黙つてしまつて、眼に涙をうかべて、声援しましてね。ヨハンはことに、露原さんに、哀切な別れを感じてゐたやうでした。どうといふことがあるわけでは、決してないのですが)（「ことづけ」271 頁）

引用のように、サランが「純真で」「美しい未開の心情」の少女として語られている。そして、先生への深い感情が語られながらも、

臺灣大學學術期刊資料庫

それをすぐさま「どうといふことがあるわけでは、決してないのですが」と否定され、彼女の「純真」が堅く守られている。

そして、「リオン・ハヨンの谿」に出てきた白百合や鐘も「ことづけ」に登場している。しかし、それぞれの意味が書き直されていて、元の意味を持たなくなっている。例えば、「リオン・ハヨンの谿」では谷間から伸びてくる白百合がリオン・ハヨンの生まれ変わりのメタファーとして登場したのに対して、「ことづけ」では、「新高百合」が「そんな悲劇があつたなどとは夢にも知らぬといふ顔で」盛りと咲いていて、生まれ変わりとしての意味を失っている。そして、前作でリオン・ハヨンの死場所としての谿も、「ことづけ」になると、「彼女が露原さん万歳と言ひながら落ちたのだという谿」へと国策色がより濃厚となっているのである。

一方、「リオン・ハヨンの谿」では、台湾総督が鐘を贈呈したことについて全く触れることなく、ただリオンの腰にかけていた鐘という登場であったが、「ことづけ」では、サランの腰につけていた鐘が、台湾総督が贈呈した「サランの鐘」と関連付けられており、「蕃界人への愛国精神」を鼓吹するためのプロパガンダとしての鐘となっていた。

最後に、「リオン・ハヨンの谿」、「ことづけ」の相違を比較しながら考えてみる。「ことづけ」では「リオン・ハヨンの谿」にみられる恋愛物語の要素が一切排除され、白百合の持つ、純潔や、生まれ変りとしてのメタファーを有してない。逆に言えば「リオン・ハヨンの谿」においては、「私」は「私の物語」/「私」の恋に執着したため、恋愛の要素が強く溢れてきて、逆に愛国乙女サヨンの神聖性と鐘の政治性が排除される羽目になっているのである。更に、前述した通り、真杉静枝のこの両作品がどれほど国策と肩を並べたのか、または離れたのかを測るには、帝国の思いを的確になぞった教科書版「サヨンの鐘」が重要な指針となるとすれば、教科書版を大いに超える「その千丈の谿の底に身をのまれてしまつた陥落の際、少女は、立派な国語で、露原先生万歳！といつた」という国策描写を持

臺灣大學學術期刊資料庫

つ「ことづけ」は、「リオン・ハヨンの谿」よりも遥かに敏感に時局を嗅ぎ取り、迅速に対応したといえよう。「リオン・ハヨンの谿」と「ことづけ」両作品は、同時に 1941 年 11 月の作品集『ことづけ』に収録されたゆえ、両作品の実際の創作時間が定かではなかったため、前後の順序が不明のまま現在に至った。しかし、1941 年 4 月 14 日にて行われた長谷川総督の鐘贈呈という時間を以て、両作品を見比べれば、迅速かつ機敏に総督の鐘贈呈に対応した「ことづけ」は、「リオン・ハヨンの谿」の後に書かれた作品だとすぐ合点できるだろう。

そして、「リオン・ハヨンの谿」と「ことづけ」の相違をどう捉えるべきかというと、それは、作家真杉静枝の、「リオン・ハヨンの谿」の失敗への修正と補完、並びに時局への呼応なのではないかと思われる。その裏付けになるのは、単行本のタイトルを『ことづけ』にしたことであろう。要するに、従来の作品では、よく恋愛を描く作家真杉静枝は「リオン・ハヨンの谿」では、確かに、語り手「私」の恋愛や思慕を描いた。しかし、「私」が恋愛に執着しすぎたため、本来神聖性の持つはずのリオン・ハヨン/サヨンや、プロバガンダとしての鐘が台無しになってしまっている。そこで、そのような失敗を補うため、後作の「ことづけ」では、迅速に時局と呼応しあう形で、わざわざ後日談の形をとって、作品の国策色を強めたのであろう。

今まで「リオン・ハヨンの谿」と「ことづけ」は、よく並列で読まれてきたが、両作品の相違に着目すれば、「ことづけ」は、むしろ「リオン・ハヨンの谿」の国策外れを修正するために、書かれた作品だと考えるべきではなかろうか。

五、おわりに

本稿は、女性作家・真杉静枝の作品「リオン・ハヨンの谿」「ことづけ」を中心に検討した。まずは、視点人物「私」の、村西に向ける〈恋心〉に着目することで、村西とリオン・ハヨンは、一見、性欲

臺灣大學學術期刊資料庫

を暗喩するような、「セクシュアルな関係」かのように見えるが、それはあくまでも「私」の恋の挫折によって、二人の関係にむけた眼差しが歪んで映し出されたものであると考えられる。そして、帝国の宣伝道具である新聞記事のみならず、絵描きである私が、女性の身体の純潔性を規範する白百合を描くことによって、彼女の「セクシュアリティ」が再び封印されていることが分かった。最後に「リオン・ハヨンの谿」と「ことづけ」の相違点に着目したところ、「ことづけ」は、「リオン・ハヨンの谿」の国策外れを修正するために、書かれた作品だということが明らかになった。

【付記】

本稿は2014年11月29日台湾日本語教育学会国際シンポジウムでの発表原稿（「戦時下小説にみる〈軍国美談〉の借用－真杉静枝「リオン・ハヨンの谿」「ことづけ」を中心に―」）と、2017年7月1日天理台湾学会第27回研究大会での発表原稿（「真杉静枝「リオン・ハヨンの谿」「ことづけ」論―白百合を手がかりとして―」）に加筆修正したものである。口頭発表及び論文投稿の際にいただいた諸先生からの貴重なご意見、ご指摘に心より感謝申し上げます。なお、本研究は、2014年度台湾行政院科技部研究計画による研究成果の一部である。（「軍國美談、皇國少年、戰時下的少國民─昭和十年代文學中的〈後方〉(II-I)」計画番号：MOST103-2410-H-155-033）。

【テキスト】

河原功監修（2000）『真杉静枝『ことづけ』日本植民地文学精選集台湾編7』ゆまに書房

【参考文献】

山中恒（1986）『少国民はどう作られたか』筑摩書房
中内敏夫（1988）『軍国美談と教科書』岩波書店

臺灣大學學術期刊資料庫

藤井省三編（2002）『台湾の大東亜戦争―文学・メディア・文化』東京大学出版会
周婉窈（2003）『海行兮的年代―日本殖民統治末期臺灣史論集』允晨文化出版
坪内廣清（2003）『国民学校の子どもたち―戦時下の「神の国」教育』彩流社
岡野幸江等編（2004）『女たちの戦争責任』東京堂出版
中島利郎編・著（2005）『日本統治期台湾文学小事典』緑蔭書房
荊子馨（2006）『成為日本人:殖民台灣與認同政治』麥田出版
下村作次郎（2007）『「サヨンの鐘」関係資料集』緑蔭書房
渡部周子（2007）『〈少女〉像の誕生－近代日本における「少女」規範の形成』新泉社
李文茹（2008）「殖民地·戰爭·女性―探討戰時真杉靜枝台灣作品」『台灣文學學報』12 期、63-80 頁。
呉佩珍（2012）『中心到邊陲的重軌與分軌 日本帝國與臺灣文學·文化研究(中)』國立臺湾大學出版中心
呉佩珍（2013）『真杉靜枝與殖民地台灣』聯經出版

臺灣大學學術期刊資料庫